

曲目解説

文・佐藤亜紀子

宮廷から民へ

——スウェーデン・バロックと伝承舞曲

今回のプログラムは、アンデシュ・ソーン（1860-1920）の『故郷の調べ』というダーラナ地方の民族衣装を着た女性がリュートを弾いている絵から着想を得たものです。このリュートは、私が普段弾いているリュートとは違います。これは18世紀にスウェーデンで作られた独特の楽器で、イギリスで16世紀に流行した金属弦でフレットが打ち付けられたシタールと、イタリアで17世紀初頭に登場した竿の長いテオルボを合体させたような構造で「スウェーデンリュート」と呼ばれ、18世紀から現代にまで形を変えながらも弾き続けられています。

私はこの楽器を弾いたことがないので、それに一番近い、18世紀後半まで弾かれていて、板外弦がついたスワンネック型のバロックリュートをこのコンサートのために選びました。さらにフラウト・トラヴェルソとヴィオラ・ダ・ガンバというバロック時代の古楽器とともにバロックの宮廷舞踏と現代に伝わるスウェーデン伝承舞曲を演奏し、時代と文化を越えてクロスオーバーする音の旅へのご案内します。

ベルマン（Carl Michael Bellman 1740-95）はスウェーデン国王グスタフ3世の時代に活躍した詩人、作曲家、歌手です。リュートの弾き語りや社交界や酒場を沸かせ、リュートを抱えた肖像画が残っています。ムートン（Charles Mouton c.1626-c.1710）は17世紀フランスのリュート奏者で、彼の曲集をベルマンの祖父が購入したそうです。フランスのリュート音楽はスウェーデンに手稿譜として多数伝えられています。ルーマン（Johan Helmich Roman 1694-1758）は王宮礼拝堂付きの音楽家でスウェーデンのヘンデルとも言われた人物。ケルナー（David Kellner 1670-1748）はドイツ人ですが、スウェーデンに渡り、カリヨン、オルガン奏者となりました。スウェーデンの王室礼拝堂の学長であったデューベン（Gustaf Düben 1628-90）は諸外国の音楽を集め、それらは現在「デューベン・コレクション」として当時のスウェーデンの音楽状況を知る上での貴重な資料となっています。そこからニコライ（Johann Michael Nicolai 1629-85）とメーダー（Johann Valentin Meder 1649-1719）の作品を演奏します。

スウェーデンの伝承舞曲には、意外にもバロック時代の曲と共通点がみられます。ハリングでの息の長い下降していくゼクエンツは、バロック時代の即興演奏のようです。最後に演奏するポルスカでは曲の後半をバロック時代の舞曲のシャコンヌ風にアレンジしました。

バロック音楽と伝承舞曲、二つの世界のあいだに境界線はあるのか、それとも自然に溶け合うのか——耳と心で味わっていただければと思います。



アンデシュ・ゾーン『故郷の調べ』
1920年 油彩、カンヴァス
スウェーデン国立美術館蔵 Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



スワンネック型バロックリュート